

# オオオニバスの補光栽培について

高井敦雄・西澤永恵・荒木大蔵

平成26年8月は連日の雨により、記録的な日照不足の月となった。そのためか熱帯スイレン温室に植栽している試乗会用のロングウッドオオオニバスの生育が芳しくなく、8月20日を皮切りに4日間開催される試乗体験会での葉の利用が危ぶまれたため、投光器による補光を行うこととした。その生育結果について報告する。

## 1 方法

オオオニバス類の植栽鉢(180×180×60cm)や周辺のスイレンを植えていた鉢(直径約80cm)にハウスパイプを突き立て、投光器(300W)を設置した(写真1)。照射した葉は、主に生育初期の若い葉に行った。照射距離は30cm～60cmで行い、照射期間終了まで24時間連続照射で行った。なお、照明は、照射に適切な次の葉が展開するまでは、そのまま照射し続けた。

## 2 結果および考察

葉の生育結果については、別表のとおりであった。照射期間は、8月11日～26日まで行った。2日続けて葉の直径サイズが同じになった段階で、測定を打ち切った。最初の照射距離は、照度と葉の温度を勘案して決定した。照射距離30cmで約5,000lux増加し、葉の温度は31℃であったため、問題ないと判断し、この距離とした。しかし、葉が大きくなるにしたがって、照明の位置を変えざるを得なくなった。植栽鉢内にハウスパイプを突き立てられなかったり、コードの長さが足りなかったりと、常時30cmの距離を維持することができなかった。5日ほど1枚

の葉に投光器1つを照射していたが、生育状況に好転の兆しが認められないと感じたため、照明を1～3基増設した。本来なら増設に伴い距離を変える必要があったが、当初そのままの距離で行ったため葉に高温障害が生じた(写真2)。そこで、距離を50cmとしたところ、高温障害は生じなかった。

照明1基と複数の照明を当てた時の生育状況に差は認められないと感じた。

照明を当てる前に生育し寿命を迎えた葉のサイズと照射した葉のサイズの比較から判断すると、照明設置に著しい効果は感じられなかった。本来なら対象区を設けるべきであるが、大型の植物であるため、栽培スペースの関係や日照条件を揃えることが困難なため、対象区は設置できなかった。

今回の生育不良は、8月の記録的な日照不足(平年の4割)の影響もあると思われるが、その他に植栽池の水を全部排水し、清掃を2回行ったこと(前年12月と当年5月)も関係していると感じている。前年の株を当年も継続して栽培したため、池の清掃時に株を傷めたことも影響したと思われる。池の清掃時に株がなく、5月の池清掃後に苗を植え付けたパラグアイオニバス(定植鉢直径80cm)やオオオニバスはそれぞれ90cmと147cmまで生育したため、日照不足の影響をあまり感じさせなかった。



写真1



写真2

ロングウッドオオオニバスの葉直径 (cm) の推移

照明数	1基	1基	1基	1基	1基	1基	1基	2基	3基	1基	3基	2基
照射距離	30cm	30cm	30cm	30cm	30cm	30cm	30cm	30cm	30cm	30cm	50cm	50cm
計測日(月/日)												
8/11	95	75	100	90	96	100						
12	96	85	102	98	98	102						
13	96	86	102	100	98	102	72					
14		86		100			80					
15							—					
16							101	42	69	82		
17							106	※1 59	※1 86	88		
18							106	74	93	91		
19								74	93	91	51	
20											※2 73	
21											84	37
22											91	61
23											94	80
24											96	90
25											97	90
26											97	

※1 高温障害発生 ※2 以降照明4基距離60cm